

食育に関するアンケート調査結果の概要 (一般県民)

1 朝食の摂取状況

朝食の摂取

全体としては、「毎日必ず食べる」に該当する人が、平均 86.7%となりました。

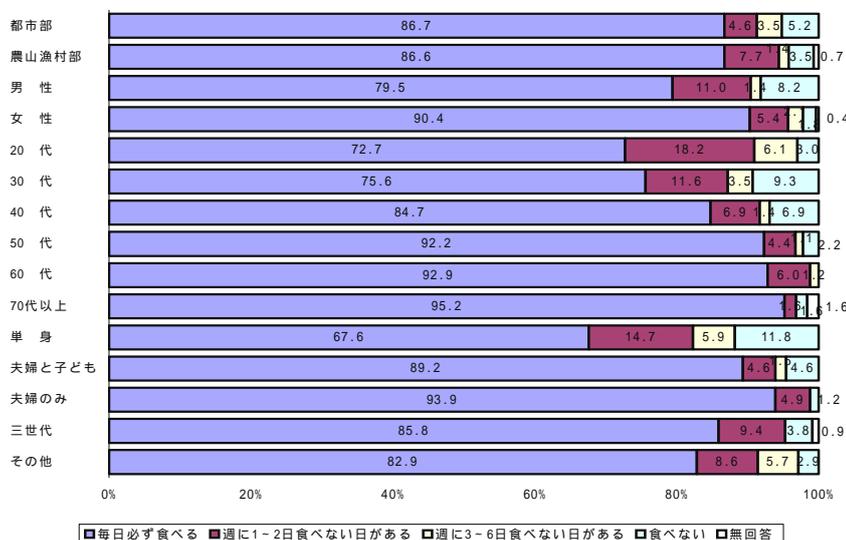
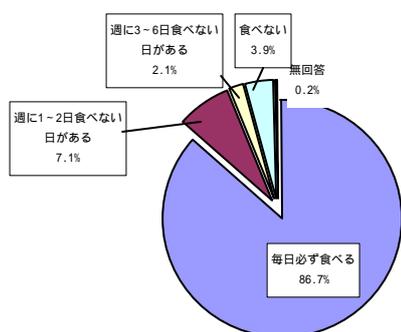
居住環境別では、都市部居住者が 86.7%、農村部居住者が 86.6%と、差は見られません。

性別による特徴としては、「毎日必ず食べる」男性が 79.5%、女性が 90.4%と、性差が認められます。また、朝食欠食を示す「食べない」に該当する人も、男性 8.2%、女性 1.8%と性差が大きいと認められます。

年代による特徴としては、「毎日食べる」に該当する人が一番少ないのが 20 代で、72.7%ですが、年代が上がるに従って「毎日食べる」に該当する人の割合が増え、「食べない」に該当する人の割合が一番多いのは 30 代の 9.3%です。

家族構成による特徴としては、単身者が「毎日必ず食べる」に該当する人が最も少なく、67.6%、「食べない」に該当する人も最も多く、11.8%でした。

「毎日必ず食べる」に該当する人が最も多いのは、夫婦のみの家族構成で、93.9%となっています。



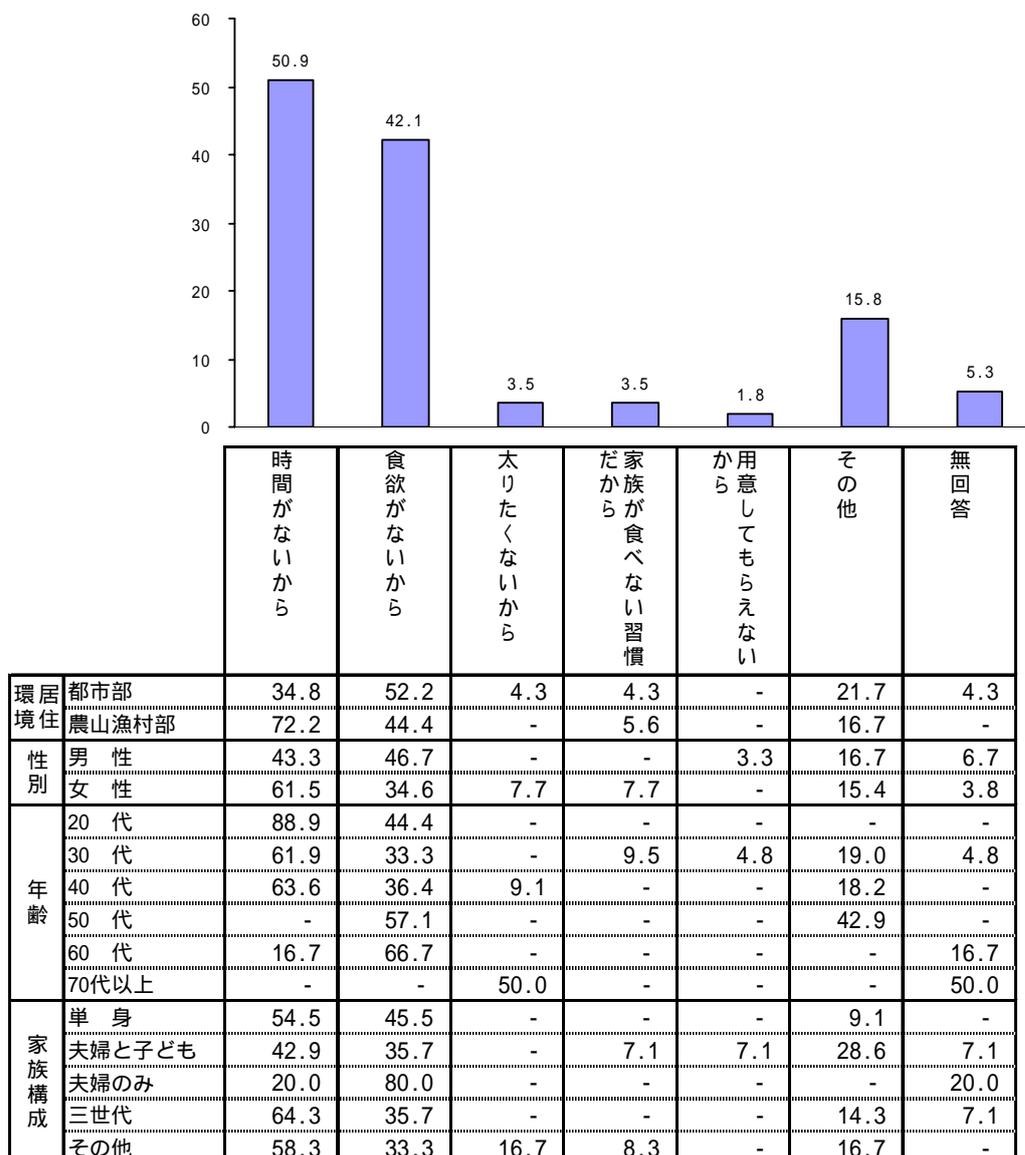
～朝食を食べない理由～

全体では、「時間がないから」50.9%、「食欲がないから」42.1%、「太りたくないから」と「家族が食べない習慣だから」がそれぞれ3.5%の順となっています。

居住環境別では、都市部居住者では「食欲がないから」が52.2%、「時間がないから」が34.8%であるのに対し、農村部居住者は「時間がないから」が72.2%、「食欲がないから」が44.4%と、食べない理由に差が見られます。

性別による特徴は、男性が「食欲がないから」46.7%、「時間がないから」43.3%であるのに対し、女性が「時間がないから」61.5%、「食欲がないから」34.6%と差が見られます。

年代別による特徴としては、20代が「時間がないから」88.9%、「食欲がないから」44.4%、30代・40代では「時間がないから」が60%台、「食欲がないから」が30%台であるのに対し、50代では「食欲がないから」57.1%、60代では「食欲がないから」66.7%となります。



2 食事環境

食事相手

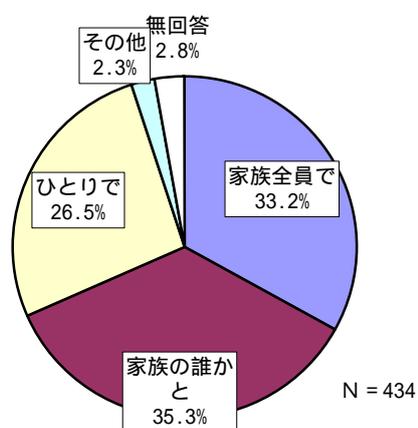
全体では、朝食を「ひとりで」食べるが26.5%、夕食を「ひとりで」食べるが15.4%となります。

性別による特徴としては、男性で朝食を「ひとりで」食べるが30.1%、夕食を「ひとりで」食べるが22.6%であり、全体と比べて割合が若干高いと言えます。

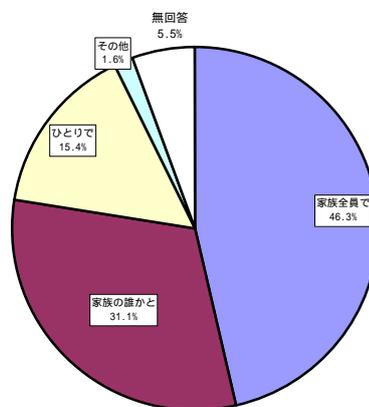
年代による特徴としては、朝食では50代で「ひとりで」食べるが32.2%が最も高いのに対し、逆に夕食では50代で「ひとりで」食べるが6.7%と、最も低い結果になりました。

夕食を「ひとりで」食べる比率が一番高いのは20代であり、27.3%となっています。

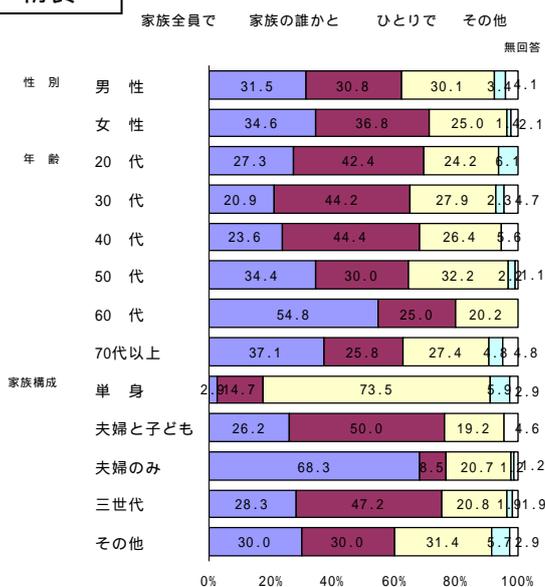
朝食



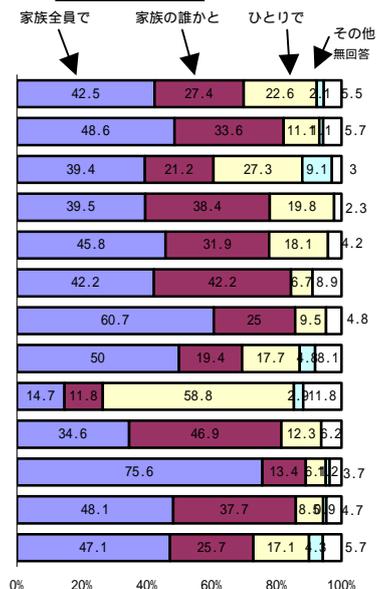
夕食



朝食



夕食



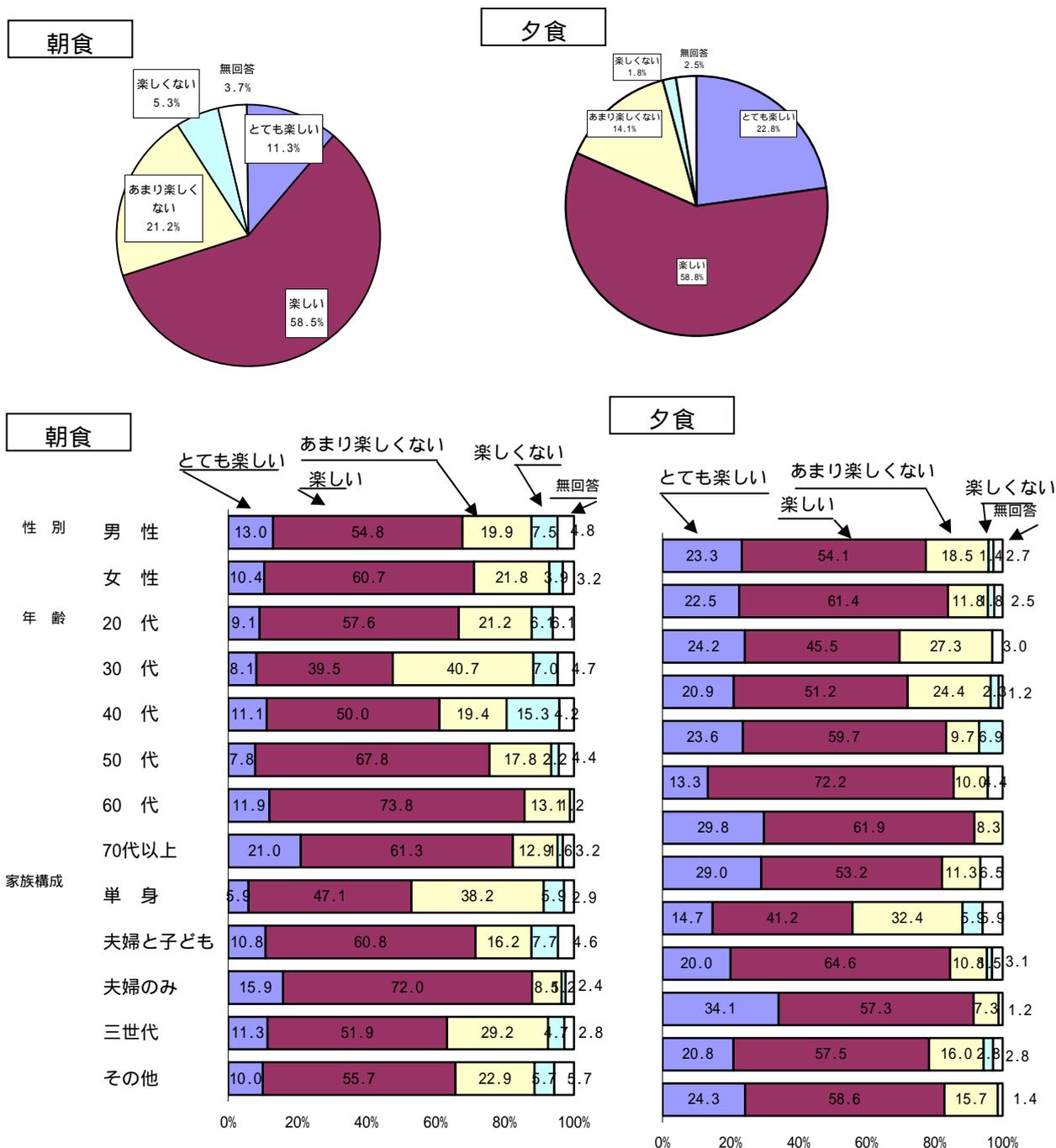
食事の楽しさ

全体では、「あまり楽しくない」、「楽しくない」とを合わせた割合が朝食で 26.5%、夕食で 15.9%でした。

性別による特徴としては、男性で「あまり楽しくない」、「楽しくない」とする割合が朝食で 27.4%、夕食で 19.9%と高くなっています。

年代別では、「あまり楽しくない」、「楽しくない」とする割合が朝食は 30代で 47.7%と突出して高いと言えます。夕食は 20代で「あまり楽しくない」、「楽しくない」を選んだ割合が 27.3%と高くなっています。

家族構成別では、朝食夕食ともに単身者がそれぞれ 44.1%、38.3%と突出して高くなっています。



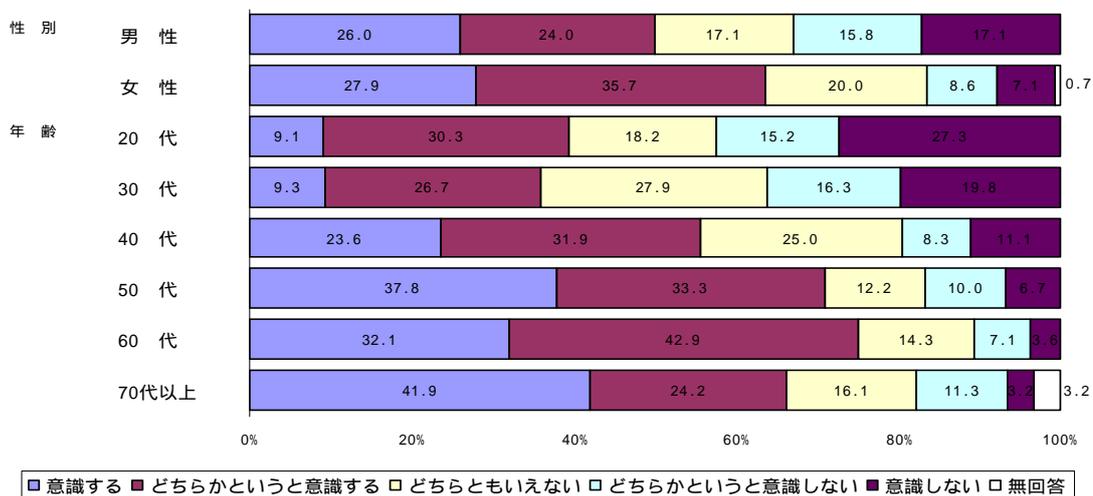
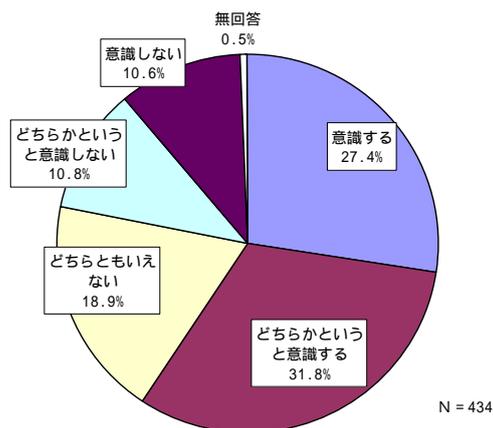
3 食への関心

地場産食材への関心

全体では、買い物するとき、富山県産であることを「意識する」、「どちらかという意識する」とする割合は59.2%となりました。反対に、「どちらかという意識しない」と「意識しない」とする割合は21.4%となっています。また、「どちらともいえない」は18.9%となっています。

性別による特徴としては、女性で「意識する」、「どちらかという意識する」とする割合が63.6%であるのに対し、男性では「意識する」、「どちらかという意識する」とする割合が50.0%となりました。

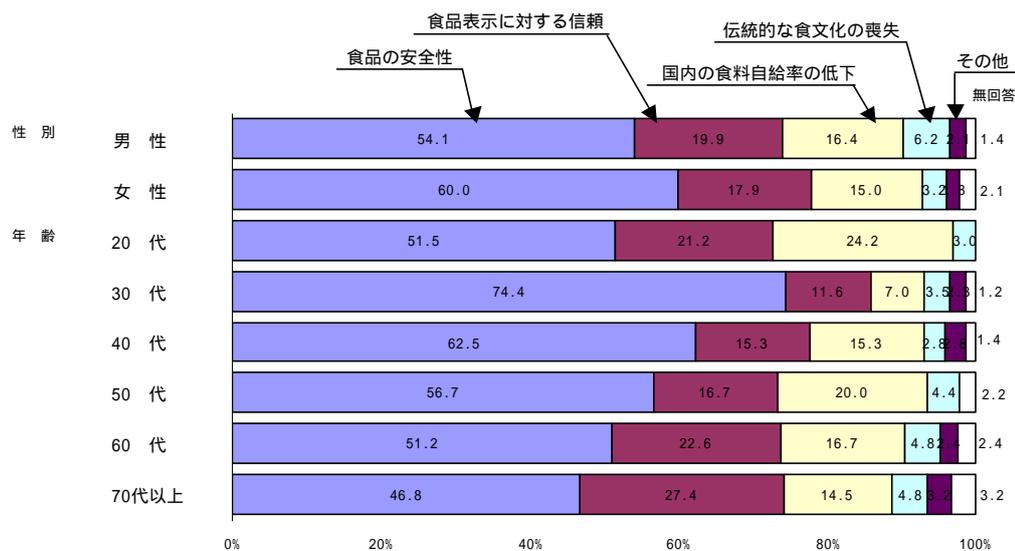
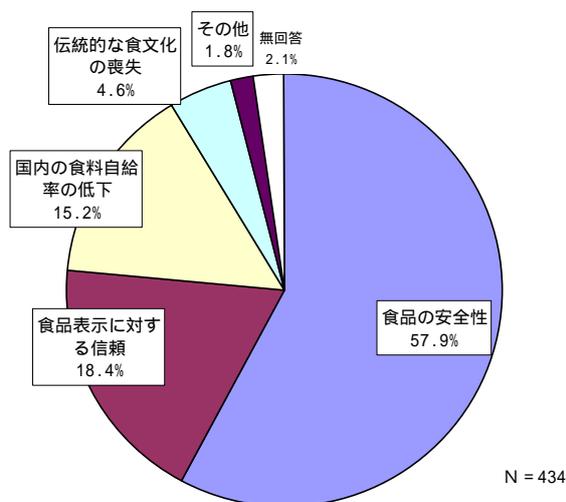
年代別では、20台、30台で「意識する」の割合が相対的に低く、「意識しない」の割合が相対的に高いのに対し、年代が上昇するにつれ、概ね「意識する」の割合が高くなり、「意識しない」の割合が低くなっています。



食に関して不安に感じること

食に関して、特に不安に感じることでは、「食品の安全性」をあげた人の割合が 57.9%と最も高く、以下「食品表示に対する信頼」(18.4%)、「国内の食料自給率の低下」(15.2%)、「伝統的な食文化の喪失」(4.6%)の順となっています。

年代別の特徴としては、20代では「国内の食料自給率の低下」をあげた人の割合が想定的に高く、24.2%となっており、「食品表示に対する信頼」(21.2%)を上回っています。同様に、50代でも「国内の食料自給率の低下」をあげた人の割合が高く、20.0%となっており、「食品表示に対する信頼」(16.7%)を上回っています。30代では「食品の安全性」の割合が74.4%となっており、突出して高くなっています。



4 食に関する知識

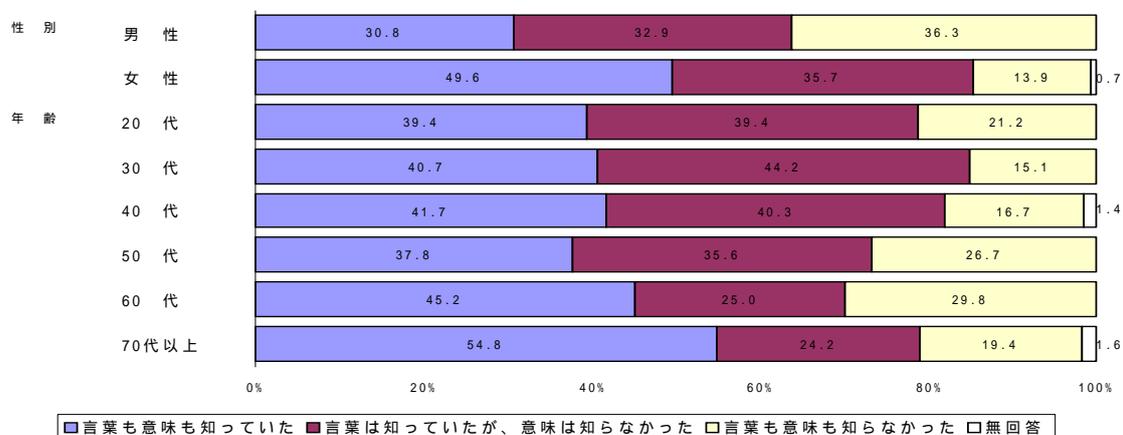
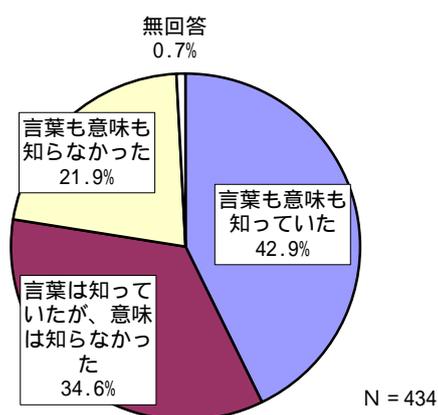
「食育」の認知度

全体では、「言葉も意味も知っていた」42.9%（内閣府調査 26.0%）、「言葉は知っていたが、意味は知らなかった」34.6%（内閣府調査 26.6%）となっており、内閣府調査と比べると本県の県民の「食育」認知度はかなり高いと言えます。

性別による特徴としては、女性で「言葉も意味も知っている」49.6%、「言葉は知っていたが、意味は知らなかった」35.7%と、割合が高くなっています。

年代別では、50代で減少していることを除けば、年代が上がるにつれ「言葉も意味も知っていた」の割合が高くなっています。

「言葉は知っていたが、意味は知らなかった」割合が一番多いのは、30代でした。



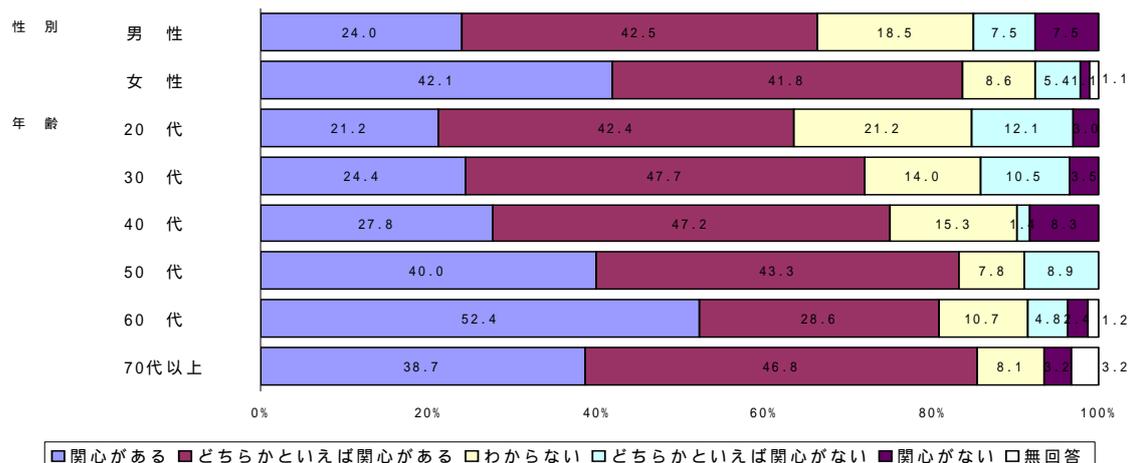
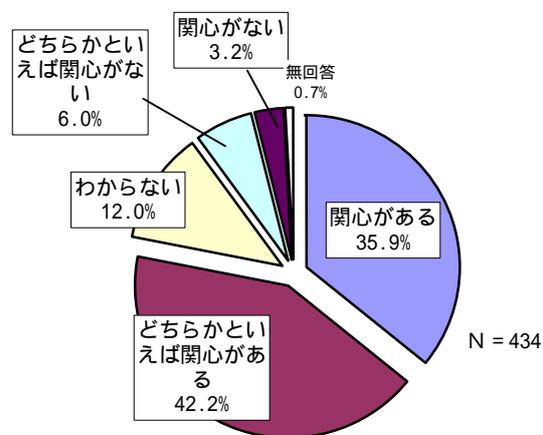
「食育」への関心

全体では「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」とを合わせて78.1%（内閣府調査69.8%）となりました。

性別による特徴としては、では、女性で「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」とを合わせて83.9%であるのに対し、男性では66.5%であり、男女の差が大きいと言えます。

年代別の特徴としては、20代で「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」とを合わせて63.6%で低いのに対し、概ね年代が上がるごとに関心の割合が高まり、70代以上では85.5%となりました。

また、「関心がある」の割合が一番高いのは60代で、52.4%でした。



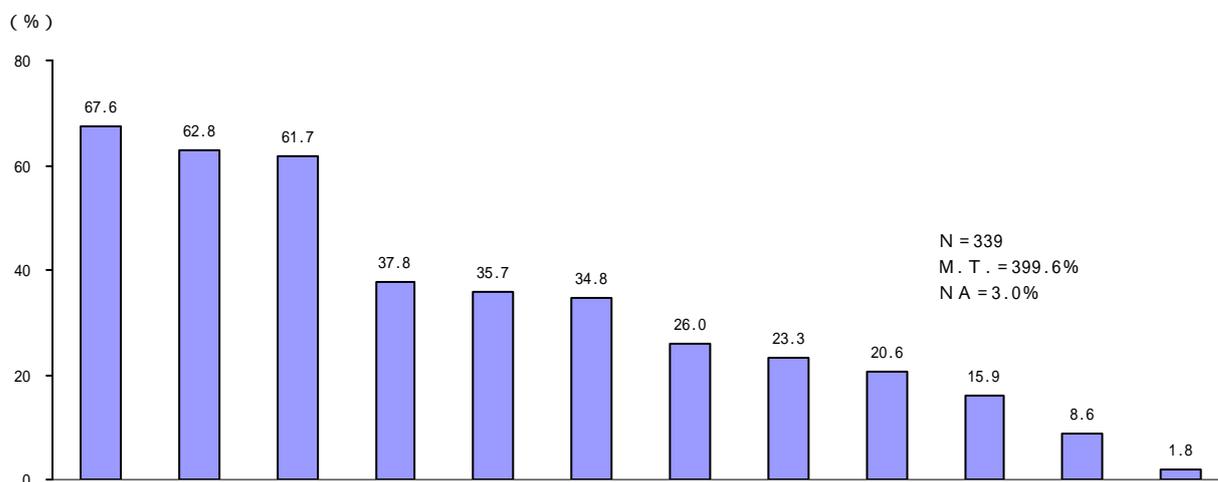
～「食育」に関心がある理由～

全体では、11 挙げた理由のうち、「食生活の乱れ（栄養バランスの崩れ、不規則な食事）が問題となっているから」67.6%、「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」62.8%、「生活習慣病（ガン、糖尿病等）の増加が問題となっているから」61.7%の順で割合が高くなっています。

性別による特徴としては、男性で「食生活の乱れ（栄養バランスの崩れ、不規則な食事）が問題となっているから」の割合が 71.1%と若干高いのに対し、「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」の割合が 49.5%と低くなっていますが、女性では「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」が 69.4%で最も高い割合となっています。

年代別による特徴としては、20 代で「食生活の乱れ（栄養バランスの崩れ、不規則な食事）が問題となっているから」の割合が 81.0%と高いのに対し、「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」の割合が 52.4%と低くなっています。

また、30 代、40 代の子育て世代で「子どもの心身の健全な発育のために必要だから」の割合が 80%を超えて高いのに対し、70 代以上では 37.7%と低くなっています。



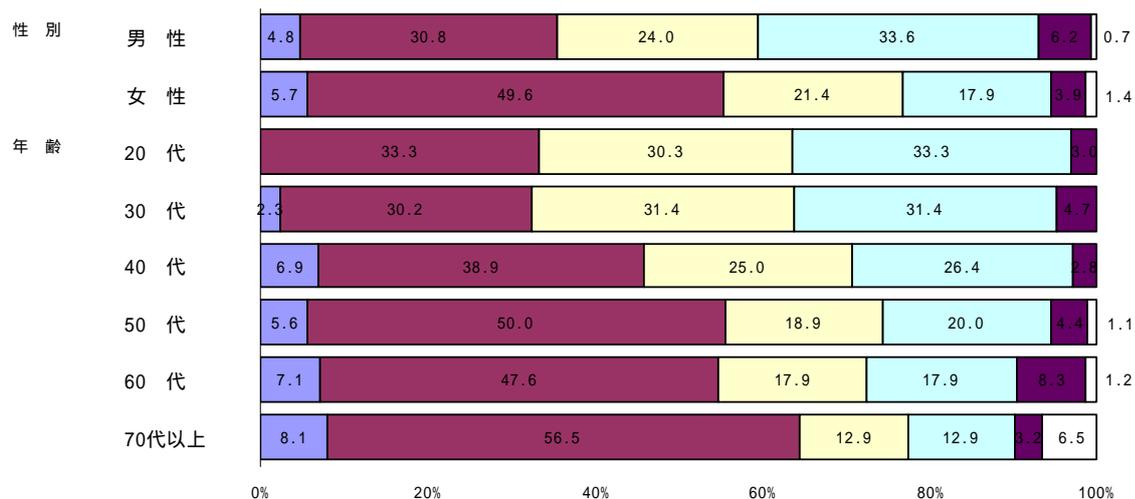
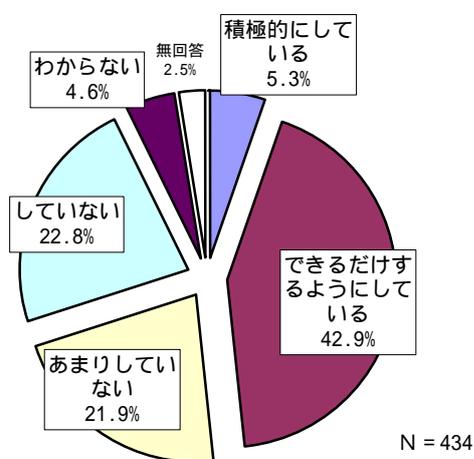
		食生活の乱れ（栄養バランスの崩れ、不規則な食事）が問題となっているから	子どもの心身の健全な発育のために必要だから	生活習慣病（ガン、糖尿病等）の増加が問題となっているから	自然の恩恵や食に対する感謝の念がうすれていくから	食料を海外からの輸入に依存しすぎる	食生活の確保が重要だから、食品の安全	大量の食べ残しなど食品廃棄物が問題だから	有機農業など自然環境と調和した食料生産が重要だから	肥満や、やせすぎが問題となっているから	食をまわることが地域の文化や伝統を守ることに重要だから	消費者と生産者の間から交流や信頼が足りないと思うから	その他
性別	男性	71.1	49.5	58.8	30.9	30.9	29.9	28.9	18.6	27.8	7.2	9.3	2.1
	女性	67.2	69.4	63.4	41.3	38.3	37.0	25.5	25.1	16.6	20.0	8.5	1.7
年齢	20代	81.0	52.4	66.7	42.9	19.0	38.1	33.3	4.8	14.3	23.8	4.8	-
	30代	64.5	82.3	48.4	35.5	22.6	30.6	30.6	16.1	12.9	14.5	4.8	-
	40代	74.1	83.3	66.7	38.9	37.0	48.1	25.9	16.7	13.0	16.7	7.4	1.9
	50代	68.0	54.7	54.7	37.3	37.3	34.7	25.3	22.7	17.3	17.3	6.7	1.3
	60代	66.2	63.2	75.0	42.6	54.4	36.8	33.8	33.8	26.5	16.2	8.8	4.4
	70代以上	64.2	37.7	66.0	32.1	32.1	22.6	11.3	32.1	34.0	13.2	18.9	1.9

「食育」活動・行動

全体では、「積極的にしている」と「できるだけするようにしている」とを合わせた割合が48.2%（内閣府調査52.0%）となり全国と比べ、若干低くなっています。

性別による特徴としては、男性で「積極的にしている」と「できるだけするようにしている」とを合わせた割合が35.6%と低くなっています。

年代別による特徴としては、「積極的にしている」と「できるだけするようにしている」とを合わせた割合が20代で33.3%（「積極的にしている」を選んだ人は0%）、30代で32.5%と低いのに対し、40代以降は年代が上がるにつれ、「積極的にしている」と「できるだけするようにしている」とを合わせた割合が高くなる傾向があります。



～「食育」活動・行動をしていない理由～

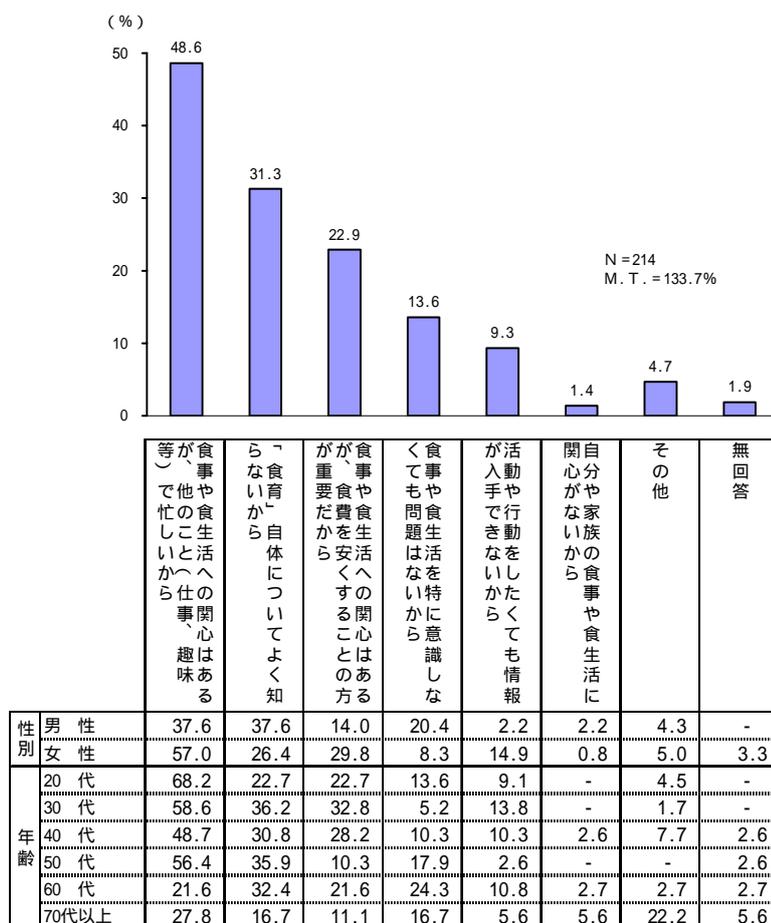
全体では、「食事や食生活への関心はあるが、他のこと（仕事、趣味等）で忙しいから」48.6%、「食育」自体についてよく知らないから」が31.3%、「食事や食生活への関心はあるが、食費を安くすることの方が重要だから」22.9%の順となりました。

性別による特徴としては、男性では「食事や食生活への関心はあるが、他のこと（仕事、趣味等）で忙しいから」と「食育」自体についてよく知らないから」がともに37.6%となり、次に「食事や食生活を特に意識しなくても問題はないから」が20.4%となりました。

女性では、「食事や食生活への関心はあるが、他のこと（仕事、趣味等）で忙しいから」が57.0%と割合が高くなっています。

年齢別では、「食事や食生活への関心はあるが、他のこと（仕事、趣味等）で忙しいから」が20代で68.2%、30代で58.6%、50代で56.4%と高く、「食育」自体についてよく知らないから」が30代で36.2%、50代で35.9%と高くなっています。

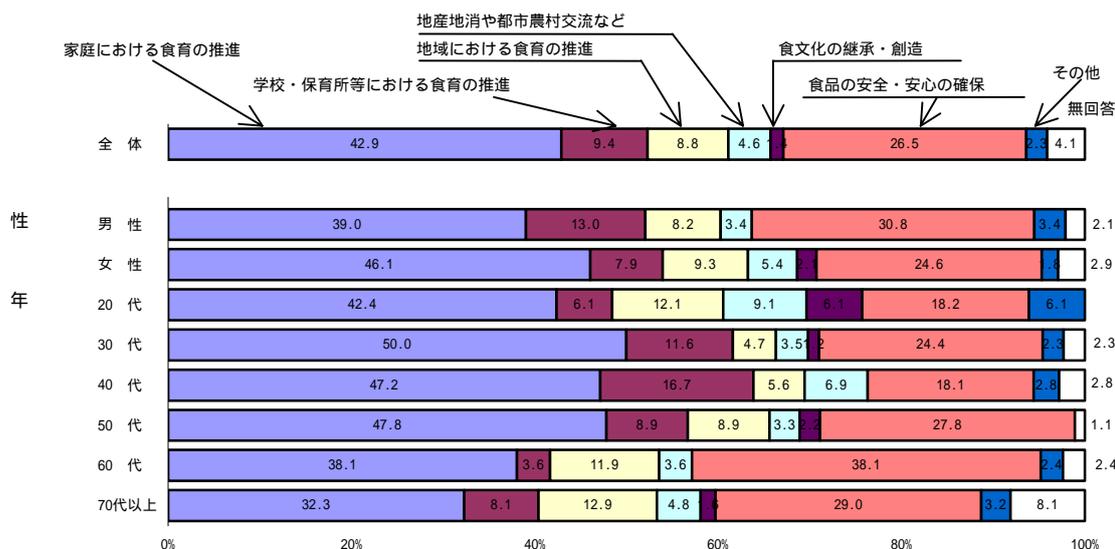
また、「食事や食生活への関心はあるが、食費を安くすることの方が重要だから」が30代で32.8%、40代で28.2%と高く、「食事や食生活を特に意識しなくても問題はないから」が60代で24.3%と高いのが特徴的と言えます。



「食育」の取組に求めること

全体では「家庭における食育の推進」42.9%、「食品の安全・安心の確保」26.5%、学校・保育所等における食育の推進」9.4%の順となりました。

性別、年代別によりそれぞれの比率は変わるが、60代で「家庭における食育の推進」と「食品の安全・安心の確保」が同率で38.1%なのを除くと、この順位は変わりません。



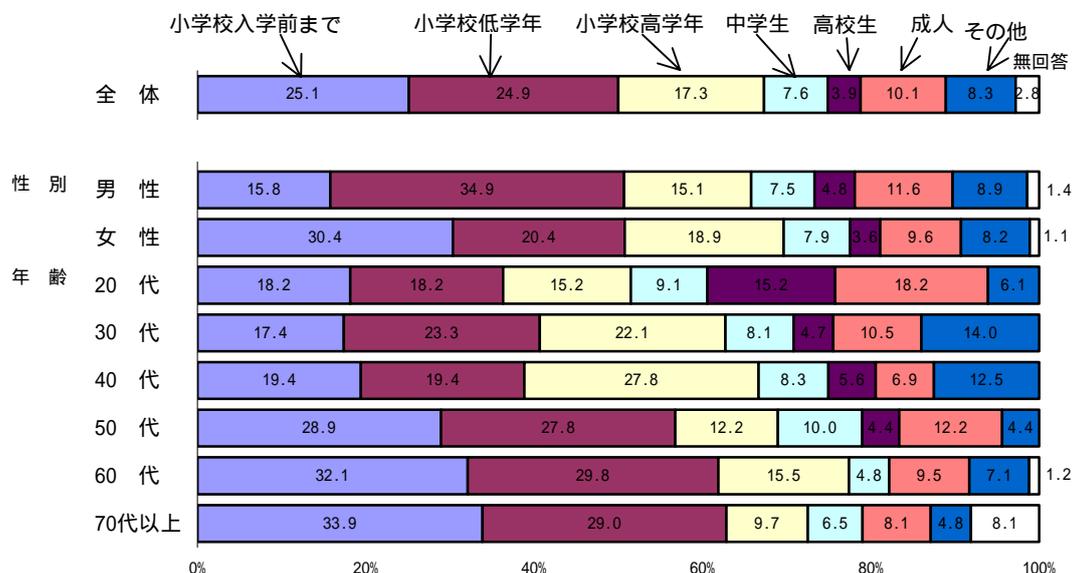
「食育」が必要だと思う世代

全体では「小学校入学前まで」が25.1%、「小学校低学年」が24.9%、「小学校高学年」が17.3%となり、合計67.3%で「小学校入学前まで～小学校高学年」で大半を占めることとなりました。

性別による特徴としては、男性では「小学校低学年」が34.9%で、女性では「小学校入学前まで」が30.4%で最も多い比率でとなります。

年代別の特徴としては、20代では「小学校入学前まで」、「小学校低学年」、「成人」がそれぞれ18.2%である。また、「高校生」が15.2%と高くなっています。

30代以降は、概ね全体の比率と同じ傾向であるが、30代と40代では「小学校高学年」の比率がそれぞれ22.1%、27.8%と高いのに対し、50代以降は年代が上がるにつれ、「小学校入学前まで」と「小学校低学年」の比率が高くなっています。



「食事バランスガイド」の認知度

全体では「知っている」が23.5%となっています。

性別による特徴としては、「知っている」を選んだ男性が17.1%と低くなっています。

年代別による特徴としては、20代が12.1%、50代が18.9%とそれぞれ低い結果が出ています。

